

日本の神社仏閣名の英訳について

——京都の神社仏閣を中心に——

米 田 淳 貴

0. はじめに

本稿では、日本、特に京都府に存在する神社仏閣名の英訳をテーマとして取り扱う。今日、日本が関わるニュースが国際的に大きく報道されている。和食の無形文化遺産登録、富士山の世界遺産登録、2020年のオリンピック開催都市に東京都が選ばれる等、日本が国際的なニュースを賑わしている。また、訪日する外国人も増加傾向にあり、日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2015年2月の訪日外客数は138万人以上であり、当時の単月過去最高の訪日外客数を記録した。国際的に注目を集めつつある今、日本社会で最も強く、国際化社会への順応を求められているのは観光業界であろう。日本の観光庁は、観光を極めて重要な成長分野と位置付け、地域活性化、雇用機会増大などの観点から、日本の観光立国化を不可欠なものと認識している。本稿では、日本の観光立国化という視点を持ちつつ、日本の観光における英訳の重要性について、日本文化の大きな魅力の一つである神社仏閣を題材に用いながら考えたいと思う。

今回、本稿では京都府の金閣寺（鹿苑寺）と伏見稲荷大社を題材として用いる。京都府内の数多くの神社仏閣の中でも、特に多くの外国人観光客を惹きつけているのが、金閣寺と伏見稲荷大社である。近頃、参拝者向けの解説を載せた小さなパンフレットや案内図を配布している神社仏閣が非常に多く、金閣寺と伏見稲荷大社もそうである。また、それらに他言語の解説を載せる、もしくは他言語のパンフレットを別途に作成、配布している神社仏閣も多く見受けられるようになっている。本稿では、他言語の中でも特に英語に焦点を絞り、パンフレットの他にも、英語で京都を紹介した書籍、旅行ガイドブックやウェブサイト上での英訳、実際に設置されている道路標識や案内看板など、様々な媒体の英訳を収集し、京都府の国際都市化、ひいては日本の観光立国化のために、最も有用である英訳方法を検証することが最たる目的である。

1. 金閣寺

京都市北区にある鹿苑寺、通称金閣寺は、金箔で装飾した豪華絢爛な舍利殿、通称金閣が有名であり、京都市内にある仏閣の中でも一、二を争う程の知名度と人気を誇る寺である。それに伴い、国内外問わず、多くの観光客がこの寺を参拝するため、日本語だけでなく、英語表記がとても重要となる。第1節では、金閣寺の英訳を媒体毎に分類して検証していく。

1.1 パンフレット、書籍における金閣寺の英訳

外国人観光客にとって、パンフレットやガイドブック、京都を紹介した書籍は、手軽に日本の文化や歴史を知り得ることができる媒体の一つである。書籍に関しては、洋書コーナーや旅行ガイドのコーナーの一角に、京都を紹介した書籍専用のコーナーを設ける書店も増えている。多くの外国人観光客が目にする媒体であるのは勿論のこと、我々日本人にとっても、どのように日本の観光地を英語で説明するのかを知るという点では、非常に重要な媒体である。したがって、外国人観光客がわかりやすく、興味を惹く英訳をすることが必要である。

表1 パンフレットおよび書籍における金閣寺の英訳

媒体 / 翻訳者	英 訳
金閣寺パンフレット	Kinkaku-ji
佐藤 (2001 : 41-46)	Kinkaku-ji Golden Pavilion
セイン (2008 : 124)	Kinkakuji Temple
バーダマン (2015 : 97)	Kinkaku-ji Kinkakuji The Golden Pavilion
広瀬 (2014 : 100-101)	Kinkaku Temple
ピディントン&ワックス (2008 : 126)	Kinkaku-ji Temple (Golden Pavilion)
フルフォード (2011 : 99)	Kinkakuji, the temple of the Golden Pavilion
横野 (2010 : 160-165)	Kinkaku-ji
モリス (2014 : 110-113)	Kinkaku-ji ('the Golden Pavilion')
ロフタス (2009 : 100-101)	Kinkaku-ji Temple

表1は金閣寺のパンフレットの英訳と9名の翻訳者の英訳をまとめたものである。用いられている英訳方法をまとめると以下のようになる。

I : 部分的、もしくは全てをローマ字化する (Kinkakuji, Kinkaku-ji, Kinkaku Temple)

II：ローマ字化し、その後に temple を付け加える (Kinkakuji Temple, Kinkaku-ji Temple)

III：金閣寺を「金」「閣」「寺」の三単語に分けて、各単語を英訳し複合語を作る (the temple of the Golden Pavilion, the Golden Pavilion)

まず I の英訳方法についてだが、金閣寺という固有名詞を英訳する際に用いられる第一の英訳は、パンフレットにおいても書籍においても、I の英訳方法であることがわかる。ローマ字化の利点は、日本語が読めない外国人でも、日本語の読み、発音のままで様々な名前を知ることができる点であり、つまり、全ての固有名詞をローマ字化すれば外国人観光客は、その固有名詞の読みを理解することができる。また、外国人観光客と我々日本人との円滑なコミュニケーションを手助けするという重要な役割も持つ。道行く日本人が道に迷った外国人観光客に “Where is the Golden Pavilion?” と尋ねられるよりも、“Where is Kinkakuji?” と尋ねられる方がわかりやすく、円滑に会話が進むだろう。日本の国土交通省は、ローマ字は外国人観光客にとってわかりづらいものと認識しているが (1.3にて後述)、ローマ字は外国人観光客と我々日本人が共有できる表記であり、観光地の繁栄には不可欠なものである。また、この I の英訳方法にはハイフンを用いる英訳と用いない英訳の2種類が存在する。例えば、金閣寺の英訳の場合、Kinkakuji と Kinkaku-ji の2種類の英訳が可能である。この2種類の英訳の違いは、単語の認識の違い、つまり、「金閣寺」という一単語として認識するか、もしくは「金閣」「寺」という二単語構成の複合語として認識するかの違いである。表1においては、若干ハイフンを用いた英訳が多く見受けられるが、ハイフンの有無が英訳の意味を大きく変えてはいない。金閣寺という固有名詞において、日本語話者は、寺という語を固有名詞の一部として認識し、また同時にその固有名詞が属するカテゴリーを示す指標語としても認識しており、ハイフンの有無によって、この2種類の認識を別々に外国人に認識させることができる。しかし、これはあくまで日本語話者の認識の区別を示したものに過ぎず、日本語が話せない外国人が日本を観光する際の必携な知識であるとは言えず、わざわざハイフンを付けてローマ字化する明確な理由はないと考えた方がよいかもしれない。

II の英訳方法は I のローマ字化する英訳方法に加え、temple を付け加える英訳方法であるが、この temple の役割は英訳する固有名詞のカテゴリーを明確にすることである。ji (-ji) と temple はどちらも寺という意味を持つ語であるため、例えば、Kinkakuji (Kinkaku-ji) Temple という英訳を和訳すると、金閣寺寺となり、意味が重複した不自然な和訳となる。日本人、もしくは漢字に多少の知識がある人にとっては、金閣寺がいわゆる仏閣であるというのは、寺という漢字を見れば容易にわかることだが、temple を付け加えず金閣寺を Kinkakuji (Kinkaku-ji) とローマ字化するだけでは、日本語についての知識を持たない外国人観光客にと

っては、金閣寺という読みは理解できても、金閣寺がいわゆる仏閣なのか神社なのか、はまた別荘なのかがわからず、外国人観光客の理解を求めるには、少々丁寧に欠ける英訳となる。そこで、わかりやすい英訳にするために、temple を付け加え、Kinkakuji (Kinkaku-ji) Temple と英訳し、金閣寺が仏閣であるということを目でわかるようにした上で、付け加えられる temple は、「～という寺」という、英訳される対象物、今回の場合ならば、金閣寺のカテゴリーを示す語として認識する。成瀬 (1996) はこの temple のように、翻訳対象のカテゴリーを示す語を分類辞 (specifier もしくは classifier) と表している。

表 1 では、広瀬 (2014) は部分的に、他の翻訳者は全体をローマ字化しているが、ここで佐藤 (2001)、バーダマン (2015)、ピディントン&ワックス (2008)、フルフォード (2011)、モリス (2014)、以上の翻訳者の英訳に注目したい。彼らは I もしくは II の英訳方法に加えて、全くローマ字化を用いず、金閣寺を英訳している。ローマ字化の英訳の補足としてではあるが、彼らは金を Golden、閣を Pavilion と英訳おり、金閣を the Golden Pavilion という複合語で英訳している。この複合語を用いる英訳方法、つまり、III の英訳方法の利点は、ローマ字化よりも読み手の好奇心、興味をより惹き付けることができる点である。金閣寺の魅力は、その名の由来ともなっている豪華絢爛な金閣 (舍利殿) である。金閣を kinkaku とローマ字化する I や II の英訳方法だけでは、金閣の読みを示しただけに過ぎないが、the Golden Pavilion と英訳すれば、金閣の豪華絢爛さ、つまり、金閣の外観が訳出できるため、読み手の好奇心、視覚的な興味を惹くことができると考えられる。しかし、表記ではなく、読み方を共有する I や II の英訳方法とは異なり、解釈に知識を要するのが III の英訳方法の欠点である。金は Golden、閣は Pavilion という風に、ある単語に相応する別の単語を認識していなければ、この III の英訳方法を用いたコミュニケーションは取れない。聞き手側に英語の知識がなければ、“Where is Temple of the Golden Pavilion?” と話し手が尋ねても答えられず会話が成立しない可能性が高い。したがって、この III の英訳方法は、英語話者間での英訳の共有は可能であるが、その英訳を他言語話者と共有するには、英語以外の他言語話者が英語の知識を持っていないければならず、I や II の英訳方法と比較すると、翻訳者側からの一方的な情報の提供という点が強いことが特徴である。

パンフレットと書籍で用いられている金閣寺の英訳は、以上の 3 種類に分類される。パンフレットや書籍に載せる英訳は、日本語に対する知識を持たない外国人観光客が理解しやすい英訳であることが必要だと先述したが、この点を鑑みると、金閣寺をローマ字化する I や II の英訳方法だけでなく、金閣を the Golden Pavilion と英訳する、III の英訳方法を用いた英訳を補足することで、外国人観光客にもわかりやすく、また視覚的な好奇心、興味を惹く英訳が可能となる。そして、この III の英訳方法は日本人の翻訳者よりも外国人の翻訳者のほうが好んで用

いていることが表1からわかる。しかし、表1において、IIIの英訳方法を用いていないパンフレットおよび翻訳者が、IIIの英訳方法を全く用いていないという訳ではない。

表2 パンフレットおよび書籍における金閣の英訳

媒体 / 翻訳者	英 訳
金閣寺パンフレット	Kinkaku (The Golden Pavilion)
セイン (2008:124)	Kinkaku
広瀬 (2014:100-101)	Kinkaku golden hall the pavilion
横野 (2010:160-165)	the Golden Pavilion (Kinkaku)
ロフタス (2009:100-101)	Kinkaku (Golden Pavilion)

表2は表1の金閣寺のパンフレットとIIIの英訳方法を用いていなかった4名の翻訳者を別途抜粋したものである。表1での英訳対象は金閣寺であったが、表2の英訳対象は金閣（舍利殿）であり、表2はその金閣の英訳をまとめたものである。セイン（2008）の英訳はここでもIIIの英訳方法を用いておらず、I、IIの英訳方法のみを用いて英訳した稀有な英訳である。広瀬（2014）の英訳は少々特徴的ではあるが、彼女もIIIの英訳方法を用いており、本稿で私が選んだパンフレットおよび書籍においては、このIIIの英訳方法はほぼ全てで用いられている英訳方法であることがわかる。では、なぜパンフレットおよび広瀬（2014）、横野（2010）、ロフタス（2009）の金閣寺の英訳にはIIIの英訳方法が用いられなかったのかという疑問についてだが、まず金閣寺と金閣の違いが総称か内容物か、という点が大きく関わっている。金閣寺には、金閣だけでなく、夕佳亭や不動堂などの建造物も境内内に存在し、それらも含めて金閣寺と称しており、決して金閣だけが金閣寺なのではない。金閣が金閣寺の境内内で最も外国人観光客を惹き付ける建造物であるのは明らかなことだが、金閣寺を the Golden Pavilion と英訳すると、まるで金色の建物だけが寺である、金閣だけが金閣寺であるという誤解を生む可能性がある。パンフレット、広瀬（2014）、横野（2010）、ロフタス（2009）の金閣の英訳は、この誤解を外国人観光客に持たせないようにする、一種の配慮が窺える英訳と言える。

以上をまとめると、金閣寺の英訳においては、一方的な知識の提供という点だけでなく、外国人観光客と我々日本人との円滑なコミュニケーションにも配慮するべきであり、ローマ字化、つまり、IもしくはIIの英訳方法を用いた英訳を第一の英訳とし、それにIIIの英訳方法を用いた英訳を付加し、外国人観光客の興味を惹くのが好ましい。表1においては、フルフォード（2011）の英訳が外国人観光客と我々日本人、双方にとって最もよい英訳ではないだろうか。1.2からは別の媒体での金閣寺の英訳を検証していき、パンフレットや書籍以外の媒体では、

金閣寺をどのように英訳しているかを見ていく。

1.2 ウェブサイト上の金閣寺の英訳

パンフレットや書籍と並んで、手軽に京都の情報を手に入れられる媒体としてインターネット上のウェブサイトが挙げられる。京都に限らず日本全国の情報を英語で紹介しているウェブサイトは数多く存在し、今や実際に訪日せずに日本についての情報を得られる時代となっている。したがって、ウェブサイト上の英訳も多数の観光客が閲覧すると考えられるため、1.1のパンフレットや書籍における英訳と同様に、わかりやすく、且つ興味を惹く英訳が望ましい。また、日本を紹介するウェブサイトは海外を拠点に運営されている場合もあり、つまり、日本の有識者ではなく、外国人自身が金閣寺にどのような英語を充てているのかも知ることができる。以下の表は、ウェブサイトの中でも、特に訪日外国人観光客向けのウェブサイトにおける金閣寺の英訳をまとめたものである。

表3 ウェブサイトにおける金閣寺の英訳

ウェブサイト	英 訳
Fodor's Travel	KINKAKU-JI (TEMPLE OF THE GOLDEN PAVILION)
japan-guide.com	Kinkakuji (Golden Pavilion)
Japan National Tourism Organization (JNTO) : the Official Guide	Kinkaku-ji Temple Kinkaku-ji
JapanVisitor	Kinkakuji Temple (The Gold Pavilion)
Kyoto Travel Guide<Official>	Kinkaku-ji Temple (Golden Pavilion)
Lonely Planet	Golden Pavilion Kinkaku-ji
Rough Guides	Kinkaku-ji Temple of the Golden Pavilion
Viator	Golden Pavilion (Kinkaku-ji)
VirtualTourist	Kinkaku-ji (Golden Pavilion)
World Travel Guide	Kinkakuji Temple the Golden Pavilion

表3では、計10個の訪日外国人観光客向けウェブサイトに載せられていた金閣寺の英訳をまとめたが、ウェブサイトにおける金閣寺の英訳はIIIの英訳方法を非常に多く用いていることがわかる。表3のウェブサイトの中で、IIIの英訳方法を用いた英訳を載せていないのはJNTO

のウェブサイトだけだが、JNTO のウェブサイトにおいても、金閣寺ではなく金閣の英訳は Kinkaku (“Golden Pavilion”) としており、JNTO が完全にⅢの英訳方法を用いていない訳ではなく、これは表 2 と同様である。したがって、ウェブサイト上での金閣の英訳はⅢの英訳方法がⅠ、Ⅱの英訳方法と同程度使用されていることがわかる。ウェブサイトを使う利点は、やはり情報量の多さと無料であるという点であろう。書籍は出版社から出版されているものであるので当然有料である。パンフレットの場合は、神社仏閣の拝観料を払ってパンフレットをもらう場合と無料でパンフレットを配布している場合とに分かれるが、いずれにせよ、直接神社仏閣へ足を運ばなければ手に入れない。自国を出ずに、無料で大量の情報を事前に得ることができるウェブサイトを利用する人が多くなるのは容易に想像できる。しかし、1.1 で述べたように金閣寺を the Golden Pavilion と英訳するのは、外国人観光客が誤解する可能性がある。ウェブサイト上の英訳では、Ⅲの英訳方法を用いているのは共通しているが、英訳は the Golden Pavilion としているものが多いことがわかる。誤解を生まない丁寧な英訳、加えて外国人観光客の興味を惹くような英訳となると、Temple of the Golden Pavilion という英訳がウェブサイト上の英訳においても、理にかなった英訳と言えるのではないだろうか。

1.3 案内標識および案内看板における金閣寺の英訳

1.3 では、金閣寺の周辺に実際に設置されている案内標識や案内看板に見受けられる英訳を見ていく。案内標識や案内看板は、外国人観光客が実際に京都を訪れて目にする媒体であるが、パンフレット、書籍、ウェブサイトなどの媒体とは役割が異なる。案内標識や案内看板は、先の 3 つの媒体の役割である解説という役割を持っていない。金閣寺の場合、金閣寺の歴史的経緯を説明するのが先の媒体の役割だが、案内標識や案内看板の主な役割は金閣寺の所在を示すことである。また、先の媒体における英訳は有志の翻訳者や企業などが携わってきたものもあるが、案内標識や案内看板は国や都道府県、市町村が設置に携わっている。これはいわば、今現在設置されている案内標識の英訳が、今現在の国や都道府県、あるいは市町村の英訳に対する認識であるとも言える。したがって、案内標識や案内看板の英訳は、先の媒体以上に、観光立国化を目指す日本の英訳の是非を問う程に大変重要なものである。

実際の案内標識の英訳を見る前に、京都府の実施している案内標識の改善案について少し触れたいと思う。国土交通省近畿地方整備局は、観光立国の実現に向けて、京都市内に設置されている案内標識の表記の改善案を出しており、今現在、改善が進められている。英語表記の改善例としては、金閣寺は今までの Kinkakuji というローマ字表記から、Kinkakuji Temple という表記に改善するとしており、つまり、今までⅠの英訳方法で英訳していたものをⅡの英訳方法を用いた英訳に改めるということである。外国人観光客のためにⅠの英訳方法をより丁寧

にしたのがIIの英訳方法であるが、この改善案の資料が公開されたのが平成25年であり、ここ最近の出来事だと言える。しかし、国土交通省が外国人観光客にとってわかりやすいとしている英訳方法は、書籍の翻訳者やウェブサイト上では先んじて用いられており、国土交通省の案内標識の英訳に対する認識は少し遅れ気味であったという点は否めない。では、今現在の案内標識と案内看板の英訳を見ていく。



写真1 方向、方面を示す標識



写真2 地点までの方向と距離を示す標識

写真1と2は、どちらもいわゆる一般的な道路案内標識である。写真1の標識における金閣寺の英訳はKinkakujiとなっており、ローマ字表記、つまり、Iの英訳方法が用いられているのに対して、金閣寺への方向と具体的な距離を示した写真2の標識における金閣寺の英訳はKinkakuji Temple、つまり、IIの英訳方法が用いられている。また、写真1、2共に案内標識は車道上に設置され、主に車の運転手が見るように作られた標識であるが、写真2の案内標識は標識自体の大きさが写真1に比べて小さくなっている。また、国土交通省の改善案資料に、例として載せられていたのは、いずれも写真2のような標識であり、資料を拝見するだけでは、写真1のような標識も改善対象なのかどうかはここでは判断が付けられなかった。

国土交通省の改善案によると、これらの案内標識の英訳を改善する理由は、外国人観光客にとってわかりやすいもの、彼らが迷わないようにするためである。金閣寺を Temple of the Golden Pavilion、もしくは the Golden Pavilion とする英訳は、今日、先の媒体においては馴染みを得つつある英訳だと言えるが、そのIIIの英訳方法を案内標識に適応しない理由が、この媒体における英訳が担う役割に差異があることが一因としてあると考えられる。写真1においては、車の運転手が一瞥して、英訳を認識しなければならないという点と、金閣寺だけでなく北野白梅町という他の方面の案内も兼ねており、金閣寺の英訳だけに割けるスペースが狭い。

したがって、最低限の英訳、つまり、ローマ字化する他ないと言える。写真2の案内標識では、ローマ字化の後に temple を付け加えるⅡの英訳方法を用いているが、写真2の案内標識は写真1の案内標識と異なり、金閣寺専用のより具体的な案内標識となっており、車の運転手に加えて、観光客などの歩行者も参考にできる案内標識である。したがって、写真1と写真2は、同じ案内標識という媒体の中でも少し異なっていると言える。しかし、写真1、2ともにⅢの英訳方法は用いられていない。Ⅲの英訳方法が案内標識に用いることができるのかという点については、写真3における英訳を見てみたい。



写真3 金閣寺周辺の案内看板

写真3は標識ではなく、いわゆる案内看板である。案内看板における金閣寺の英訳には、Ⅲの英訳方法を用いた Gold Pavilion^①という英訳が補足されている。案内標識と同様に、写真3のような案内看板の担う役割も所在までの方向や距離を示すことであるが、標識よりも詳細な周辺地図を載せている看板ならば、Ⅲの英訳方法を用いた英訳を補足として載せることが可能である。しかし、写真3のような案内看板は標識と比べると小さく、また歩道上に設置されていることから、看板は観光客などの歩行者のみに向けられて設置されているものである。歩行者が立ち止まって見る案内看板であるが故に、Ⅲの英訳方法を用いた英訳を補足す

ることができると言える。

この1.3では、金閣寺周辺に実際に設置されている案内標識、案内看板の英訳を見てきた。先の3つの媒体とは違い、所在を示す標識や看板では、Ⅲの英訳方法を用いた英訳を載せるにはスペースが足りない場合がある。したがって、案内標識や案内看板という媒体においても、ⅠもしくはⅡの英訳方法が用いられている英訳が第一とすべきである。しかし、写真3のように、金閣寺をⅢの英訳方法で英訳するという動きも見受けられ、特に外国人観光客の多い金閣寺周辺では、案内標識や案内看板における英訳へ、意識が多少向けられつつあるのかもしれない。

1.4 小説『金閣寺』の英訳

これまでに採りあげた媒体は、金閣寺の歴史的経緯や見どころ、所在を説明しているものであったが、ある書籍やウェブサイトでは、三島由紀夫(1956)の小説『金閣寺』についても触れている。この小説『金閣寺』は1950年に実際に起こった金閣寺焼失事件を題材に用いており、

今現在の金閣が、焼失後5年の歳月をかけて再建されたものであるという説明も加えて、『金閣寺』を紹介している書籍やウェブサイトも見受けられる。では、小説のタイトルとしての金閣寺はどのように英訳されているかを見ていきたい。

表4 小説『金閣寺』の英訳

翻訳者 / ウェブサイト	英 訳
佐藤 (2001 : 45)	Kinkaku-ji or The Temple of the Golden Pavilion
モリス (2014 : 112)	The Golden Pavilion
ロフタス (2009 : 101)	Kinkaku-ji
Fodor's Travel	Temple of the Golden Pavilion
Japan National Tourism Organization (JNTO) : the Official Guide	Kinkakuji (The Temple of the Golden Pavilion)
JapanVisitor	The Temple of the Golden Pavilion

表4の小説『金閣寺』の英訳が、今までの媒体における金閣寺の英訳と異なる点は、ローマ字表記を全く用いていない英訳がある点である。これまでの媒体では、第一の英訳である場合とそうでない場合とがあるが、金閣寺はKinkakujiもしくはKinkaku-jiと、必ずローマ字化がなされている。しかし、小説タイトルとしての金閣寺の英訳においては、ローマ字化をせず、IIIの英訳方法のみを用いている翻訳者、ウェブサイトが見受けられる。ローマ字は、日本語話者と英語話者とが読みを共有できる点が有用な点であり、これを用いれば、“Have you read ‘Kinkakuji’?”という平易な発話でコミュニケーションが可能となるが、反対に、ローマ字化が用いられなければ、英語話者の話し手が“Have you read ‘The Temple of the Golden Pavilion’?”と聞き手に尋ねても、聞き手がTemple of the Golden Pavilionの意味するものがわからなければ会話が成立しない可能性が高い、と1.1にて先述したが、なぜローマ字化を除く例が見受けられるのか。その原因の一つとして考えられるのが、小説『金閣寺』の英訳版の存在である。『金閣寺』は1959年にアイヴアン・モリスによって初めて英訳され、その際に、彼は英訳版のタイトルを *The Temple of the Golden Pavilion* とした。表1、2では多くは見受けられなかった *The Temple of the Golden Pavilion* という英訳が、表4においてその使用頻度を増した理由は、このモリスの英訳が小説タイトルとしての金閣寺の英訳の先駆となったからだと考えられる。

彼の英訳が広く知られるようになったかどうかは、Google社の提供しているGoogle books Ngram Viewerというサービスを用いて推測できる。Google books Ngram Viewerとは、

Google 社がデジタル化した様々な書籍において、ある語が何年に、どの程度使用されているかをグラフ化して見ることができるサービスであり、このサービスを用いることで、Google 社がデジタル化した書籍に限られるが、Kinkakuji と Kinkaku-ji と Temple of the Golden Pavilion、以上 3 つの英訳の中で使用頻度の高い英訳はどれかが一目でわかる。次の図 1 は 1900 年から 2008 年の間の金閣寺の英訳の頻度を表したものである。

Google books Ngram Viewer

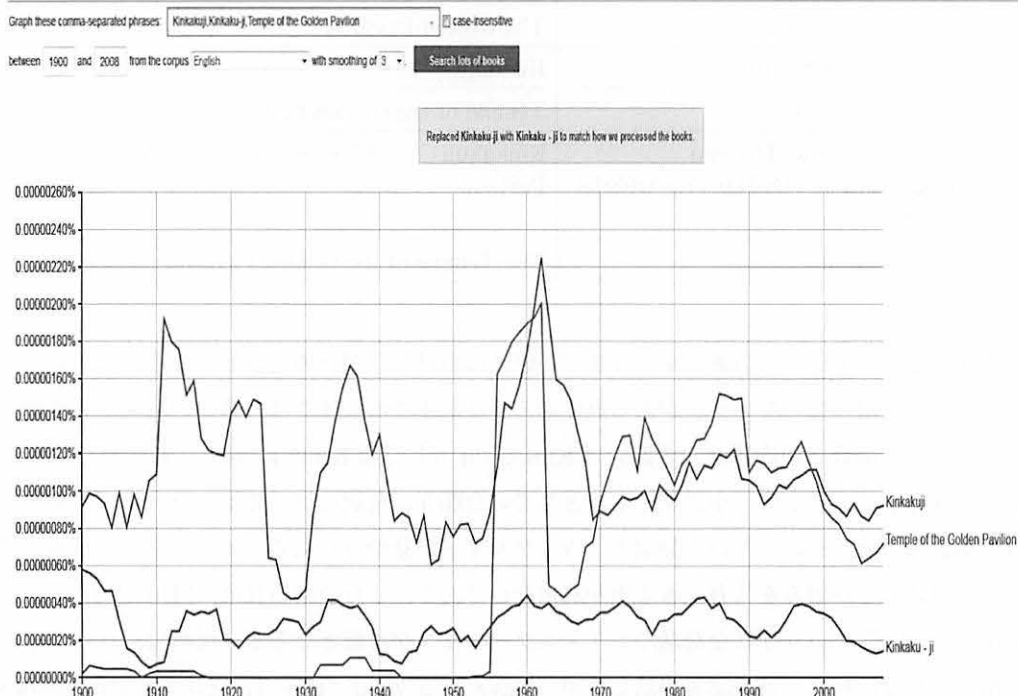


図 1 Google books Ngram Viewer による金閣寺の英訳の使用頻度

図 1 を見ると、1900 年から 2008 年の間、約 100 年間で平均的に使用頻度の高い英訳は Kinkakuji だとわかる。しかし、Temple of the Golden Pavilion という英訳は 1950 年代に一気に使用頻度が増しており、1970 年以降は、Kinkakuji よりも使用頻度が高い期間の方が多くにまで使用されている。一方で、ハイフンを用いた Kinkaku-ji という英訳は、特に大きな使用頻度の変化は見られないが、1950 年中頃以降、Temple of the Golden Pavilion よりも高い使用頻度を記録した年はない。アイヴアン・モリスが小説『金閣寺』を *The Temple of the Golden Pavilion* と英訳したのが 1959 年であり、Temple of the Golden Pavilion の使用頻度が増している年代とだいたい合致する^②。したがって、唯一無二の原因であるとは断言できないが、

彼の The Temple of the Golden Pavilion という英訳が1950年代に誕生し、今日に至るまで、文学から観光というカテゴリー間の垣根を越えて、固有名詞の英訳に大きな影響を及ぼしていると考えられ、小説のタイトルとしての金閣寺の英訳は The Temple of the Golden Pavilion に統一した方が無用な英訳タイトルの混在が避けられるのではないだろうか。

1.5 金閣寺の英訳のまとめ

第1節では、金閣寺を例に採りあげ、様々な媒体における金閣寺の英訳を見てきた。どの媒体においても、用いられる英訳方法は先述した3種類であった。

Iの英訳方法を用いる利点は、日本語話者と英語話者とが同じ読みを共有できるため、道案内や金閣寺を紹介する場面などにおいて、円滑なコミュニケーションを行うことが可能である点である。また、ローマ字表記は少ない文字数で固有名詞の読みを表すことができるので、案内標識ではこの英訳方法が非常に多く用いられている。

IIの英訳方法は、ローマ字化に加えて、英訳対象である金閣寺がどのようなカテゴリーに属しているかを示す語である分類辞 (specifier もしくは classifier) を語尾に加える英訳方法であり、ローマ字化のみの英訳方法よりも日本語がわからない英語話者に寄り添った英訳方法と言える。先の媒体では、ローマ字化する英訳方法とローマ字化した上に分類辞を付加する英訳方法、これら2種類の英訳方法のどちらかが第一の英訳となっている媒体が非常に多く見受けられ、今日の神社仏閣名の英訳方法として、最も用いられている英訳方法だということがわかるかと思う。また、日本の国土交通省は、この分類辞を付加する英訳方法を外国人にもわかりやすい英訳と認識し、ローマ字化しか用いられていなかった案内標識などの表記をこの英訳方法に統一する改善案を出し、今日、京都ではこの改善案が実施されつつある。

IIIの英訳方法は、金閣寺という固有名詞を「金」「閣」「寺」の三語に分解し、各語に相応する英語、つまり、「金」は「Golden (Gold)」、「閣」は「Pavilion」、「寺」は「Temple」と英訳し、それらを組み合わせ、英語の複合語を作ることで英訳する方法であり、ローマ字化は用いない。この英訳方法の利点は、ローマ字化では表現できない金閣寺の外観を英訳することができるため、外国人にとって魅力的、興味を惹かれる英訳ができる点である。Kinkakuji もしくは Kinkakuji Temple というローマ字表記は、固有名詞の読み方を示しただけであるが、この英訳方法を用いて Temple of the Golden Pavilion と英訳することで、この寺院には金色の楼閣があるという説明的意味を英訳に含ませられると言える。また、限定的ではあるが、作家の三島由紀夫 (1956) の小説『金閣寺』を初めて英訳したアイヴァン・モリスは、タイトルを *The Temple of the Golden Pavilion* としたことから、この英訳が小説『金閣寺』の英訳版タイトルとして認知されるようになってきたことは、Google books Ngram Viewer から推測で

きる。しかし、この英訳方法を用いると、総じてローマ字表記よりも長くなるため、道路の案内標識には向かない。また、日本人にとってこの英訳方法は未だ馴染みが薄いといえ、英訳を用いてコミュニケーションをとるという点を鑑みるとローマ字化に劣る。したがって、この英訳方法を用いた英訳を第一の英訳とするには、現状では日本人側の認識が至らず、外国人観光客のみに向けられた英訳となってしまう。書籍、ウェブサイトなどの一方通行の情報のやり取りを想定している場面、そしてそれら情報を多く載せられる媒体における英訳としては有用かもしれないが、人対人のコミュニケーションをする場面には不適切な場合がある。

2. 伏見稲荷大社

京都市伏見区にある伏見稲荷大社は、日本全国に存在する稲荷神社の総本社である。2014年には、トリップアドバイザーというウェブサイトの調査において、伏見稲荷大社は外国人に人気の観光スポット第一位に選ばれ、現在も多くの観光客で賑わっている。この第2節では、伏見稲荷大社を題材に採りあげ、神社名の英訳を検証していく。

2.1 書籍における伏見稲荷大社の英訳

この2.1では、1.1と同様に、京都を英語で紹介した書籍における伏見稲荷大社の英訳を見ていく。金閣寺とは異なり、伏見稲荷大社ではいわゆるパンフレットのような小冊子は配布されておらず、その代わり、1枚の紙の表に境内案内図を、裏に伏見稲荷大社の簡単な解説を載せており、そこに英訳も同様に載せている。

表5の伏見稲荷大社の英訳を見ると、金閣寺の英訳と明らかに異なる点が見受けられる。伏

表5 案内図および書籍における伏見稲荷大社の英訳

媒体 / 翻訳者	英 訳
伏見稲荷大社案内図	Fushimi Inari Taisha Shrine
阿部 (2008 : 22)	Fushimi Inari Taisha
佐藤 (2001 : 84)	Fushimi Inari Taisha
セイン (2008 : 170-171)	Fushimi Inari Shrine
広瀬 (2014 : 130-131)	Fushimi Inari Shrine
ビディントン&ワックス (2008 : 133)	Fushimi-Inari-taisha Shrine
フルフォード (2011 : 24-25)	Fushimi Inari Taisha
横野 (2010 : 132-135)	Fushimi-Inari-taisha
モリス (2014 : 168)	Fushimi Inari Taisha
ロフタス (2009 : 170)	Fushimi-Inari Shrine

見稲荷大社をⅢの英訳方法を用いて英訳している翻訳者が全くいない点である。金閣寺は正式名称を鹿苑寺といい、中でも金閣（舍利殿）が特に有名であるために、金閣寺という別名で呼ばれるようになった。つまり、金閣寺という名前の由来は外観の認識であり、目で見ることができるものであるのに対して、伏見稲荷大社という名前はこれが正式名称である。伏見は地名、稲荷は祀られている神様の名前、大社は数ある同種の神社の中でも最上位、総本宮を意味する語であり、名前の由来が伏見稲荷神社の外観に表れている訳ではない。外国人観光客の視覚的興味を惹き付けるⅢの英訳方法を用いるためには、英訳に外観が表現できることが絶対条件であり、したがって、伏見稲荷大社という名前をⅢの英訳方法を用いて英訳しようとしてもできない。仮に強引にⅢの英訳方法を用いて英訳しても、あまりにも不自然な英訳となることは明らかであり、英訳方法はⅠもしくはⅡの英訳方法を用いる他ない。

2.2 ウェブサイト上の伏見稲荷大社の英訳

次に、ウェブサイト上における伏見稲荷大社の英訳を以下の表6にまとめた。

表6 ウェブサイトにおける伏見稲荷大社の英訳

ウェブサイト	英 訳
Fodor's Travel	FUSHIMI-INARI TAISHA (FUSHIMI INARI SHRINE)
japan-guide.com	Fushimi Inari Shrine (Fushimi Inari Taisha)
Japan National Tourism Organization (JNTO) : the Official Guide	Fushimi Inari-taisha Grand Shrine Fushimi Inari-taisha
JapanVisitor	Fushimi Inari Taisha Shrine Fushimi Inari Shrine
Kyoto Travel Guide<Official>	Fushimi Inari-taisha Shrine
Lonely Planet	Fushimi Inari-Taisha
Viator	Fushimi Inari Shrine
VirtualTourist	Fushimi Inari Shrine
World Travel Guide	Fushimi Inari Taisha Shrine

表6における伏見稲荷大社の英訳を見ても、Ⅲの英訳方法が全く用いられていないことは明らかであるが、金閣寺と伏見稲荷大社との英訳の間では、同じⅠ、Ⅱの英訳方法の用い方にも少々違いが表れている。まず、Fushimi Inari Shrine という英訳に目を向けたい。金閣寺の英訳において、広瀬（2014）は部分的にローマ字化する英訳方法を用いて、金閣寺を Kinkaku

Temple と英訳している。部分的にではなく、全体をローマ字化する英訳方法を用いるならば Kinkakuji (Kinkaku-ji) となり、II の英訳方法を用いるならば Kinkakuji Temple (Kinkaku-ji Temple) となるが、表1における広瀬 (2014) の金閣寺の英訳方法は少々特徴的であり、金閣寺の金閣は Kinkaku とローマ字化し、寺だけ Temple と寺に対応する語を充てて英訳している。1.1では、I の英訳方法の一種と分類したが、正確に言えば、I と II の英訳方法を組み合わせたような英訳方法である。第1節で採りあげた金閣寺の英訳のうち、Kinkaku Temple と英訳しているのは広瀬 (2014) のみである。広瀬 (2014) は英訳対象が伏見稲荷大社となっても、伏見稲荷大社の伏見稲荷を Fushimi Inari、大社を Shrine と英訳し、金閣寺の英訳の際に用いた英訳方法に倣っている。しかし、他の翻訳者やウェブサイトの場合はどうだろうか。例えば、セイン (2008) の金閣寺の英訳は Kinkakuji Temple であり II の英訳方法を用いているのに対し、伏見稲荷大社の英訳は Fushimi Inari Shrine と、広瀬 (2014) の英訳方法を用いている。ロフタス (2009) の英訳も同様である。ウェブサイトの場合も、金閣寺と伏見稲荷大社とで異なる英訳方法を用いているのが見受けられる。なぜ、金閣寺と伏見稲荷大社とで異なる英訳方法が用いられているのか。ここで再度、Google books Ngram Viewer を用いてみたい。

Google books Ngram Viewer

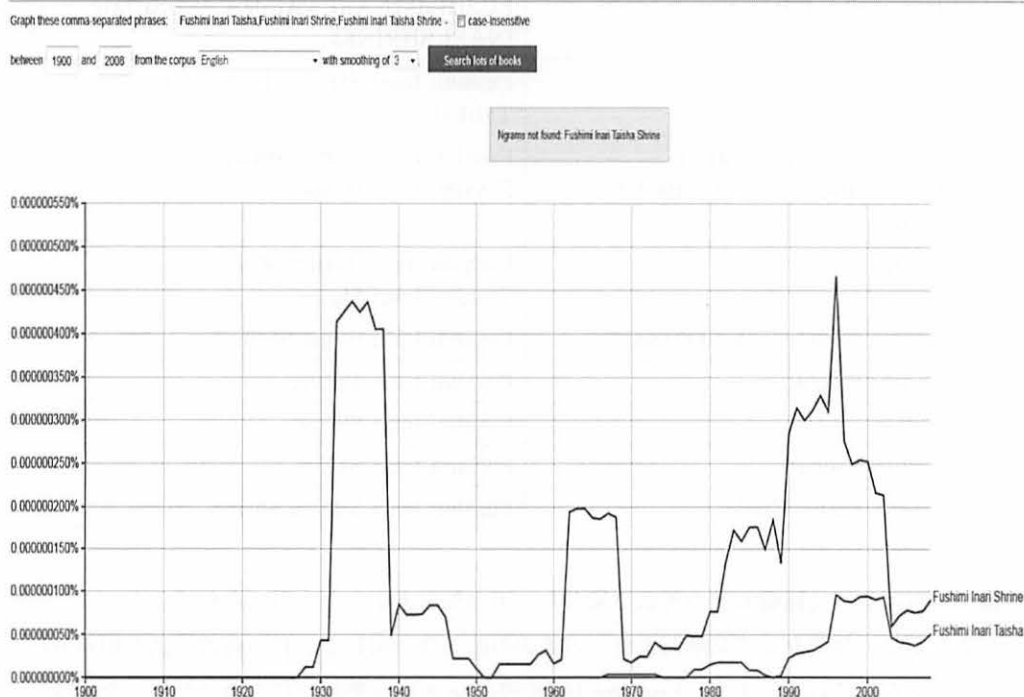


図2 Google books Ngram Viewer による伏見稲荷大社の英訳の使用頻度

Google books Ngram Viewer によると、1900年から2008年の間で用いられた伏見稲荷大社の英訳は Fushimi Inari Shrine が圧倒的に多く、2000年以降から使用頻度の差がなくなりつつあることがわかる。これは、1.4の小説のタイトルとしての金閣寺の英訳の例と似た事例だと考えられる。1959年に、小説『金閣寺』を初めて英訳したアイヴアン・モリスが付けた *The Temple of the Golden Pavilion* が先駆の英訳として認識され、小説のタイトルとして金閣寺を英訳する際には、彼の英訳をそのまま倣うべきだと1.4にて述べたが、伏見稲荷大社の英訳の場合も、初めに Fushimi Inari Shrine という英訳を充てた人物が居て、その人物の先駆の英訳が広まり、皆それを倣うようになったと考えれば、Fushimi Inari Taisha というローマ字化よりも Fushimi Inari Shrine とする英訳の方がより多く用いられていると説明できる。反対に、全体をローマ字化する英訳方法は最近になって用いられるようになったことがわかるが、では、広瀬 (2014) の英訳方法が一番多く用いられている英訳方法であるかと言えば、少なくとも金閣寺の場合はそうとも言えない。

Google books Ngram Viewer

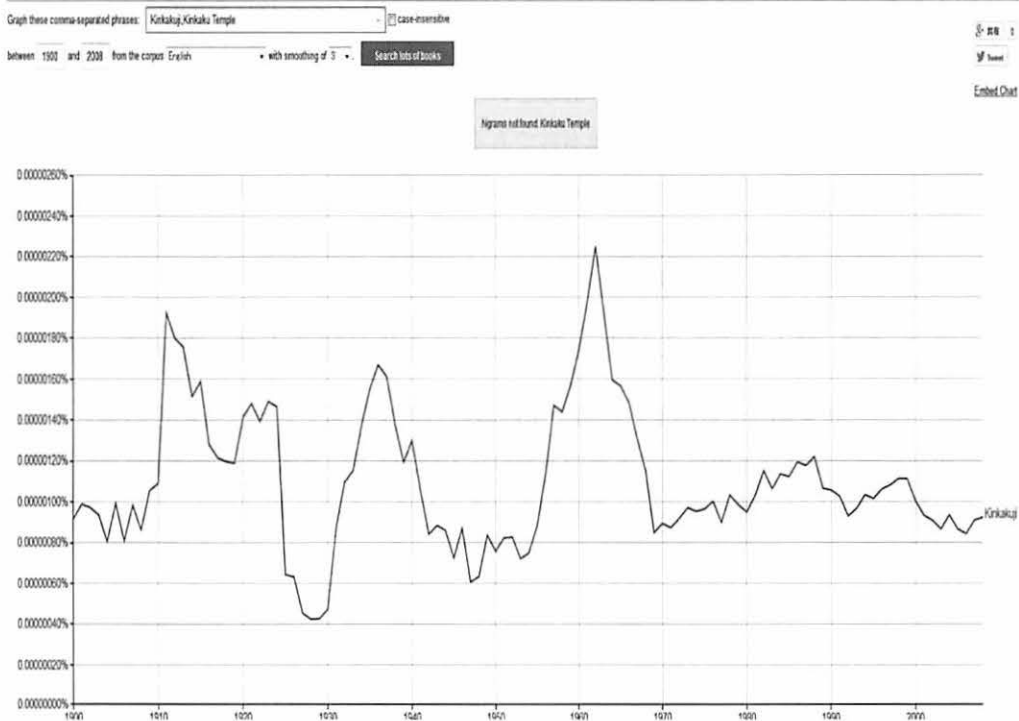


図3 Google books Ngram Viewer による Kinkakuji と Kinkaku Temple の使用頻度

図3を見てわかる通り、金閣寺の英訳の場合、広瀬(2014)の英訳方法はGoogle books Ngram Viewerではデータが確認できず、広瀬(2014)の英訳方法は全ての神社仏閣名の英訳に用いられる万能な英訳方法ではないということがわかる。その点を踏まえると、やはり伏見稲荷大社の英訳はFushimi Inari Shrineという先駆の英訳があり、それに倣うことで使用頻度が増えると考えるのが妥当ではないだろうか。

次に、分類辞に目を向けると、伏見稲荷大社特有の英訳も見受けられる。JNTOのウェブサイトにおける伏見稲荷大社の英訳は、他のウェブサイトとは異なり、Fushimi Inari-taisha Grand Shrineとなっている。用いられている英訳方法はIIの英訳方法だが、ローマ字化した後に付ける分類辞がGrand Shrine^③となっている。分類辞は英訳対象がどのカテゴリーに属する語なのかを明確にするために付ける語であることは先述したが、本稿ではTempleもしくはShrineという一語だけであった。表6におけるJNTOの英訳は、「神社」ではなく「大社」とあるという点を、Grand Shrineという複合語を使い、明確に表している。数ある神社の中の第一等の社格を表す大社を英訳の中に表すことは、他の翻訳者やウェブサイトにおける英訳と比較すると、丁寧ではあるが、1.1のローマ字化の際のハイフンを付けるかどうか、つまり、固有名詞の一部なのか、カテゴリーを表す指標語なのかを明確にするという点と同様に、大社が神社というカテゴリーの中の最上位であるという認識も、あくまで日本語の知識に過ぎない。伏見稲荷大社が日本全国の稲荷神社の総本宮であることを別途解説している書籍やウェブサイトも少なくなく、必ずしも大社を示す分類辞はGrand Shrineとしなければならないとは言い難い。神社と大社の違いが外観に表れていない以上、伏見稲荷大社を英訳する際に用いる分類辞はShrineで十分事足りるのである。

2.3 案内標識および案内看板における伏見稲荷大社の英訳

この2.3では、伏見稲荷大社の案内標識や案内看板の英訳を見ていく。金閣寺の場合とは異なり、IIIの英訳方法は全く用いることができないにも関わらず、細かな点で英訳に違いが表れており、観光地における英訳の不統一さを如実に表わしている。



写真4 地点までの方向と距離を示す標識



写真5 地点までの方向を示す標識



写真6 地点までの方向と距離を示す標識



写真7 伏見稲荷大社周辺の案内看板

計4枚の案内標識および案内看板の写真を載せたが、やはり英訳にはそれぞれ違いが窺える。最も明らかな違いは伏見稲荷大社という固有名詞をどのように分解しているかという点である。伏見は地名、稲荷は神様の名前、大社は神社の格を示す語であるので、語の区切りは「伏見／稲荷／大社」となり、「伏見稲荷」という語の区切りで認識するのは、厳密に言えば誤りである。このように英訳している写真は4のみである。なぜ稲荷が地名として認識されているかという点については、稲荷駅と伏見稲荷駅、2つの電車の駅と伏見稲荷大社の後ろにそびえる稲

荷山の存在が、稲荷を神様の名よりも、むしろ地名として認識させていると考えられる。しかしこれもまた、日本語における固有名詞の歴史的経緯に過ぎず、外国人観光客にとって、あまり重要な事柄ではないかもしれないが、狭い範囲に様々な英訳を混在させる明確な利点はない。外国人観光客の混乱をなくすためにも、同媒体間での固有名詞の英訳の統一は必要なのではないだろうか。

2.4 おわりに

本稿では、仏閣の例として金閣寺を、神社の例として伏見稲荷大社を題材に用いて、様々な媒体における神社仏閣名の英訳を検証してきた。金閣寺にせよ、伏見稲荷大社にせよ、英訳は媒体毎に担う役割が違うために、同じ固有名詞でも様々な英訳が見受けられた。現状、固有名詞を英訳しようとすれば、第一に用いられるのはローマ字化だが、そのローマ字化においても、部分的なローマ字化と全体的なローマ字化の2種類存在しており、それが媒体毎で統一されている訳でもなく、様々な翻訳者の様々な英訳が混在して、日本の観光地の英語表記を形作っている。本稿では、外国人観光客に人気の神社仏閣を題材とし、外国人観光客にとって最もわかりやすい英訳を検証してきたが、媒体毎に英訳の担う役割が異なる以上、異なる媒体間においても、杓子定規に英訳方法を画一化するのは、この固有名詞の英訳方法という議論を妨げることになりかねない。また、固有名詞はなにも神社仏閣名だけではなく、山、川、町の通りの名前なども当然含んでおり、神社仏閣名だけを採りあげて、固有名詞の英訳方法を確立するというのは不可能である。街中で英語表記を見ない日はない程に英語は日本社会に浸透しているが、まだまだ外国人観光客のわかりやすい英語表記に至っていないところも多く、あまり日本人の意識がこのような固有名詞の英訳へ向けられていないことは明らかであり、国土交通省の提案する外国人観光客にわかりやすい英語というものも、まだまだ議論の余地を多く残している。外国人観光客にわかりやすい英語についての議論を、国土交通省に留まらず、広く、盛んに行うことが日本の国際化、観光立国化には必要である。

註

- ① Gold Pavilion という英訳では、まるで金閣全体が純金製であるかのような英訳となる。あくまで金色である部分は上部の二層だけであり、一部のみが金色であるというだけで、Gold という語を英訳に用いるのは適切であるとは言い難い。
- ② 本稿では、語の使用頻度の増加についてのみに着目し、その後の使用頻度の減少については取り扱っていない。
- ③ 『研究社 新和英大辞典 第5版』(2003)における「大社」の項目では、a grand shrine となっており、JNTO の採用した Grand Shrine という分類辞はこの項目に則した分類辞である。

参考文献

- 阿部由美子 2008 『KYOTO The Greatest Travel Tips 英語で歩く京都』 東京：JTB パブリッシング
- 植田一三 上田敏子 2013 『これ一冊で！日本のことが何でも話せる 英語で説明する日本の文化』 東京：語研
- 佐藤静也著 ユニプラン編集・制作部編 2001 『SHRINES AND TEMPLES OF KYOTO An English Guidebook with a Virtual Bus Tour』 京都：ユニプラン
- セイン, ディビッド, A 英文作成 森秀治編集・執筆 2008 『京都を英語で言ってみる』 東京：成美堂
- 成瀬武史 1996 『英日英訳入門 原文の解釈から訳文の構想まで』 東京：研究社
- バーダマン, ジェームズ, M. 2015 『対訳 仏教のすべてを英語で語ろう』 東京：IBC パブリッシング
- ピディントン, マーティン, ワックス, スチュワート監修 京都新聞出版センター編 『気軽に英語でおもてなし in KYOTO』 京都：京都新聞出版センター
- 広瀬直子著 中経出版編 2014 『1 分間英語で京都を案内する』 東京：KADOKAWA-中経出版
- フルフォード, アダム英文作成・監修 森谷尅久監修 柿内尚文編 2011 『mini 版 NHK 英語でしゃべらナイト 英語で京都を案内できますか?』 東京：アスコム
- 槇野修 2010 『Discovering Kyoto in Temples and Shrines 寺社を歩けば京都がわかる』 京都：紫紅社
- 三島由紀夫 1956著 2003改版 『金閣寺』 東京：新潮社
- モリス, アイヴァン訳 三島由紀夫著2009 『The Temple of the Golden Pavilion』 London:Vintage Classics-The Random House Group
- モリス, ジョン訳 ブルーガイド編集部編2014 『楽しく歩ける! 楽々わかる! 英語対訳で旅する京都 Travel in Kyoto with simple English』 東京：実業之日本社
- ロフタス, ジョン, ハワード訳 黒澤明夫編2009 『英文 日本絵とき事典5 [京都編] ILLUSTRATED MUST-SEE IN KYOTO』 東京：JTB パブリッシング

ウェブサイト

(以下のウェブサイトは全て2015年5月25日に閲覧したものである)

- Fodor's Travel <<http://www.fodors.com/>>
- japan-guide.com <<http://www.japan-guide.com/>>
- Japan National Tourism Organization (JNTO) : the Official Guide
<<http://www.jnto.go.jp/eng/>>
- JapanVisitor <<http://www.japanvisitor.com/>>
- Kyoto Travel Guide<Official> <<http://kyoto.travel/en>>
- Lonely Planet <<http://www.lonelyplanet.com/>>
- Rough Guides <<http://www.roughguides.com/>>
- TripAdvisor <<http://www.tripadvisor.com/>>
- Viator <<http://www.viator.com/>>
- VirtualTourist <<http://www.virtualtourist.com/>>
- World Travel Guide <<http://www.worldtravelguide.net/>>

資料

国土交通省近畿地方整備局 「外国人旅行者にも“よわかる”道路案内標識にします！」 2013年11月29日公開

<<http://www.kkr.mlit.go.jp/kyoto/contents/pdf/25-1128.pdf>>

東京都 「外国人旅行者の受入環境整備方針～世界一のおもてなし都市・東京の実現に向けて～」

2014年12月公開

<<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KEIKAKU/2014/12/DATA/70ocp301.pdf>>